

## 『詩経』の中のエロス

——桃の夭々たる——

牧角悦子

東京修猷会二木会講演

2003年7月10日

### <『詩経』——古代人の祈り>

中国最古の詩集である『詩経』は、古くは『詩』と呼ばれておりました。今からおよそ四千年前、と言いますとそれは甲骨文字の出土で知られる殷王朝から、孔子の憧れた古き良き時代、周王朝、そしてその次の春秋時代という、とてつもなく長い、そして古い時代に、中国北方の黄河流域を中心とした王族・諸侯・そして民衆によって歌われ舞われた古代歌謡として、それは生まれました。世の東西を問わず、古代歌謡というものは、神への祈りから生まれるものです。『詩経』もその例外ではなく、集団の祭祀の中で、神を降ろし、巫女を通じて祈りを捧げる際の歌舞・舞劇、あるいは呪術的言語としての祈りがその本来の姿だったと考えられます。当然そこには、太古の人々の切実な祈りが反映されているわけですが、それは最終的にはほぼ二つ、すなわち五穀豊穰と子孫繁栄という人間の最も本能的欲求に集約される祈りでした。秋に豊かな収穫に恵まれること、子供をたくさん生んで労働力を確保すること、そして自分の遺伝子を絶やさないようにすること、それは、文明が高度に発達した後の時代には想像もつかないほど、素朴で、しかし熱烈な欲求だったと思います。

### <古代のエロス>

『詩経』にはいわゆる恋愛詩が多くあります。しかし、それらは恋愛という言葉で呼ぶことに抵抗を感じるほど、赤裸々で直截な求愛詩です。血筋を絶やさないようにすること、一族の繁栄を永続する事が、中国にあつては今に至るまで幸福論の根底にある事を考えると、男が女を求め、女が男を求める事は、何よりも神聖な欲求としてあつたと考えられます。時にそれは、文明という名の虚飾をまとった我々現代人の前に、この上ないエロティックな世界を繰り広げる事によって、心の奥底に眠る原始の本能を呼び覚ますものとなります。

詩を一つご紹介いたしましょう。召南「野有死麕」篇、これは未だ解釈に定説のない難解な詩です。

召南「野有死麕」

野有死麕　郊外の野に死んだ小鹿

白茅包之 白い茅で包もう  
有女懷春 春の思いに目覚めた乙女  
吉士誘之 男がいざなう

林有樸櫨 荒地に繁るブナ・クヌギ  
野有死鹿 郊外の野に死んだ鹿  
白茅純束 白い茅で束ねよう  
有女如玉 乙女はまるで玉のよう

舒而脱脱兮 ゆっくりと、そっと忍んでやって来て  
無感我帨兮 わたしの体に触れちゃいや  
無使尫也吠 犬を吠えさせちゃダメじゃない

春の思いを懐く玉のような乙女と、これを誘う男。これは紛れもなく欲情のままに求め合う男と女を歌った詩です。それを取り巻く背景には、死んだ麋くじかと白い茅ちがや、そしてクヌギやブナの茂みが描かれます。これらは恐らく生と死と、そして純と不純とをそのまま内包した大いなる自然の営みの姿であり、また同時に、その中で同じ流れに沿って生きる人々の生と死とを大きく包み込むものとしての、古代的自然観・生命観の表れでもあるでしょう。

第三章は、恐らく本は別の詩であった可能性がありますが、求め合う男と女という同じテーマで結ばれたものと思われます。ここで言う「帨」は、最も古い注釈である「毛伝」によると「腰に帯びる布」ということですが、四書五経の一つである『儀礼』士昏礼によると、娘がある年頃になった時に母親が結んでやる布、ということで、おそらく女としての特別な意味をもった「内着」のことでしょう。その「おんな」の部分に触れないで、というのは、そのまま私の体に触れないで、と言っている事であり、更に穿って言えば、はやく触れてちょうだい、ということでもあるはずです。

春の思いに誘われた乙女が、私の体にはやく触れて、と歌うこの一篇は、揶揄でも反語でもなく、人の最も根元的な欲求を素直に表現した、古代の人々の自然な情の発露であったと考えられます。

### < 『詩』から『詩経』へ >

『詩』はこのように、歌われた当初は古代人のエロスに満ちた素朴な感情の発露であったものです。ところが漢の時代になり、儒家思想が国家の教えとなると、『詩』も経典の一つ、すなわち『詩経』として、特別の敬意の対象とされてしまいます。「経典」、いわゆる四書五経とは、儒家思想のもっとも大切な教えを説いた書物のことを指します。儒家思想は、人が社会の中で生きていくために守るべきルール、すなわち人倫を最も重要視する教えであり、身を修め家を整え国家天下を統合するすべを説く思想です。この儒家思想の枠

を嵌められる事によって、『詩経』は、それが倫理道徳を教える道徳の書として、本来の姿とは異質の解釈を施されるようになっていきます。もともと恋の歌であったものが、ここで説教くさい教訓詩になってしまうのです。

例えば、召南「標有梅」篇を見てみましょう。

これは歌垣を詠った歌です。歌垣というのは「はないちもんめ」にその名残を残す古代の習俗のひとつです。春になり一斉に原野に芽吹いた植物たちは、花咲き実を結んで取り入れを待ちます。梅やスモモはなかでも早く、夏を待たず実をつけ初夏には収穫を待って熟します。それを摘むのは若者たち。彼らは一つ一つと実を積むごとに、初夏の果樹園に立ちこめる生命の息吹を吸い込み、そして自らの中にも蠢く自然の生命力の高まりを感じ、そして収穫祭の歌と踊りのリズムの中にそれを思い切り発散したい欲求に駆られるでしょう。歌垣はその時の遊戯なのです。若者たちは男と女のグループに別れ、交互に歌を歌いながら気に入る相手を探します。女は気に入った相手を見つけると、籠に持ってきた果実をその男に投げつけ、そして男がそれに腰の佩び玉で答えると、一組のカップルが出来上がります。彼らはそと歌垣の輪から離れ、思い思いに手に手を取りあって初夏の夜の中に溶け込んでゆくことになります。

歌を見てみましょう。

召南「標有梅」

標有梅      なげるわよ  
其実七兮    梅の実ななつ  
求我庶士    私のことが欲しいなら  
迨其吉兮    ほら、チャンスよ

標有梅      なげるわよ  
其実三兮    梅の実はみつつ  
求我庶士    私のことが欲しいなら  
迨其今兮    ほら、今よ

標有梅      梅の実なげて  
傾筐篋之    籠までなげる  
求我庶士    にいさんたち  
迨其謂兮    はやく言ってよ

この詩では、女は目当ての男に籠の梅を投げるのですが、いくら投げても男は答えてくれません。籠の中の梅は七つから三つと減ってゆき、終に空になってしまいます。女は最後には空の籠まで投げつけて、早く私を誘ってよ、と歌います。

この詩は、初夏の収穫祭の若者たちの生命感に溢れた求愛詩です。繰り返すリフレインと韻の踏み変えによる言葉遊びからは、戯れ歌としての軽快さを感じますが、これは決して教訓や現実批判などではないはず。ところが、この詩の儒家経典としての解釈はというと以下の通りです。まず、最も古い注釈書としての「毛伝」には、

標有梅は男女時に及ぶなり。召南の国、文王の化を被り、男女も以って時に及ぶを得るなり。

つまり、文王という立派な君子の政治の下では、男も女もきちんと時をわきまえて結婚する、と解釈します。また、南宋の朱熹の解釈では、

南国、文王の化を被り、女子も貞信を以って自ら守るを知る。其の嫁の時に及ばずして強暴の辱め有るを懼るるなり。

つまり、やはり文王の政治のすばらしさと関連づけて、女が結婚に当たって正統な条件を男に提示し、むやみに男から辱めを受けないことを歌うと解釈します。

『詩経』は孔子の編纂と言われます。実際には孔子の時代にはすでに今に近い形で残っていたものと思われませんが、孔子はこの『詩経』に対して特別の思い入れを持ち、数ある教材のうちでも道德の教科書として最も重んじました。漢の時代に書かれた「毛伝」は、その孔子の思いを受けて、『詩経』を更に厳格な倫理教科書として解釈したのですが、実は『詩経』は、漢代において既に古典であり、その正確な意味は学問研究無しにはつかみ得ないのが実情でした。時に『詩経』は儒家思想の経典として五経の中に組み込まれていましたから、当然その解釈には厳格な倫理道德観念が色濃く反映しました。上に見た「毛伝」「集伝」がその例です。そして、この道德観念を反映した詩経理解は、この後ずっと、実に19世紀の末まで続くこととなります。

このとても道義的な教訓めいた解釈が、詩の本来持つ抒情と時に大きく齟齬する事を中国の詩経学者たちは感じてはいました。しかし、それを口に出して言う事は、科举制度によって儒家思想が生活の隅々まで浸透していた士大夫たちには、到底できる事ではありませんでした。

#### <新しい詩経研究と聞一多>

近代になって、中国に新しい学術の隆盛が起きました。それは五四運動を契機にして、国外の新しい文学・思想・そして学問に触れた若者たちを中心に、これまで儒家思想の枠の中でしか価値を認められなかった全ての古典を、根本的に捕らえなおす動きとして現れました。『詩経』の中に濃厚なエロスの香りを嗅ぎ取り、その解釈に画期的な新説を齎したのは、民国初期の詩人・<sup>ぶんいつた</sup>聞一多です。この人は始め絵画を志していたのですが、二十代は詩人として活躍しました。ところが三十代を前に詩作をふつつりとやめて、中国古典研究の学者になります。杜甫をこよなく愛し、唐詩や詩経・楚辞といった分野に残した業績は、今でも高く評価されています。晩年は国内動乱の中で民主運動の闘士となり、昆明で蒋介石のスパイによる白昼テロに会って暗殺されてしまいます。その余りにも劇的な生涯もさることながら、彼の業績には、それが学術論文である事を忘れさせるような大きな魅力があります。すぐれた理性と豊かな感性が結びついた時、学問とはこんなにも創造的な世界を繰り広げる事ができるのか、と私自身この数年間、聞一多の業績に魅了されつつ、同じ学問の世界に生きる者としての共感を深めているところです。

聞一多は、『詩経』は本来古代歌謡である、という視点に基づいて、まず古代という時代に降りて行きました。そこは、自然の中に多様な神々が生きて存在する時代でした。そしてまた、人々が祈りの中で、五穀豊穰と子孫繁栄という人類の最も根元的な欲求を、赤裸々に歌い上げる世界でもありました。聞一多は「詩経の性欲観」という論文を書いています。人々はこのタイトルにまず度肝を抜かれたわけですが、それは生殖し子孫を増やすという古代人の祈りをそのまま表現したものだだったのです。こうやって『詩経』は儒家道徳のくびきからのがれ、古代歌謡としての姿を取り戻しつつあるのが現状です。上に述べた歌垣や、求愛の解釈は、この聞一多の基本姿勢に則ったものです。

### <呪物としての桃>

さて、このように『詩経』を古代歌謡として読む時、とても重要なキーを握るものに、自然界の中の特別な風物が有ります。我々はこれを呪物と呼ぶのですが、この呪物の意味を知る事で、『詩経』は古代歌謡としての呪術性を獲得します。周南「桃夭」篇を例にお話しましょう。

#### 周南「桃夭」

桃之夭夭	桃の木はわかわかしく
灼灼其華	その花はあかあかと輝く
之子于歸	この子がこうして嫁いでゆけば
宜其室家	家庭はきつとうまくゆく

桃之夭夭 桃の木はわかわかしく  
有蕢其实 大きな実がふくらむ  
之子于归 この子がこうして嫁いでゆけば  
宜其家室 家庭はきつとうまくゆく

桃之夭夭 桃の木はわかわかしく  
其葉蓁蓁 葉も青々としげる  
之子于归 この子がこうして嫁いでゆけば  
宜其家人 家庭はきつとうまくゆく

この「桃夭」篇はおそらく『詩経』の中でももっとも親しまれている一篇でしょう。この詩は結婚の祝頌歌であり、嫁ぎゆく乙女の幸福を祈るものです。燃えるように咲く桃の花、嫁ぎゆく若い娘。そして桃の木に実は稔り葉が繁るよう一家は繁栄していく。平易な語句と単純なリズムの中に、自然と一体化した命の営みが美しく歌われた詩です。

ところで、この詩の中に歌われている「桃」について、それが娘の若々しい美しさを象徴するものだという解釈がなされることが多いのですが、それは実は間違った理解です。もちろんこの詩を読んだ時、最も強烈にイメージされるのは、咲き誇る桃の花と、若く美しい乙女であることは間違いありません。実を結び葉が繁る季節の営みに沿うように、人の生もまた営まれる、その叙情は決して間違っただけではありません。しかしこの詩に歌われた「桃」は、その花の美しさや実の美味しさを言うものではなく、もっと別の重要な意味を持っているのです。

呪物というのは、呪術的な作用を以って人間に働きかける、自然界の生物・無生物を言うのですが、この詩の場合、「桃」は呪物なのです。

桃と言うと我々現代人は、やわらかくて甘い桃色の果実を思い浮かべますが、現代の桃は高度に品種改良された高級果実です。しかし桃は本来もっと小さく固く、そしてすっぱい果実でした。このすっぱい果実、それは桃だけではなく梅やスモモなどすべて、バラ科の酸果樹は、古代の人々にとってとても神聖な働きを持った樹木として捉えられていました。それは、このバラ科の酸果樹の実が、女性の妊娠中毒に効くからなのです。結婚し子供をたくさん生むことが最高の幸せであった古代においては、妊娠を阻むものはよくないものであり、妊娠を助けるものは良いものだと考えられるのは当然です。桃・スモモ・木瓜・そして梅は、その実の持つ聖なる働きによって、呪物として人々の特別な思いを吸収していきました。前の詩に見た梅も同じです。女性が男性におくる贈り物は、必ず果実と決まっており、そこには深い求愛の意味が込められているのです。

桃にはまた、もう一つの呪術性がありました。それは、果実ではなく樹木そのものの持つ辟邪作用です。「辟邪」つまり、邪悪なものを祓い寄せ付けない魔力、その実態の科学的な証明は私にはできませんが、これは中国に限らず日本でも古くから体験によって認識さ

れていたことです。中国では悪鬼を祓う樹木としてまず神話の世界に登場し、しだいに習俗の中にも取り入れられます。桃の木で作った人形を魔除けに身につけたり、桃の枝で作った弓を引いて悪霊を祓ったり、ということが漢代の多くの文献に見られます。門神（玄関や門を悪鬼から守るもの）として桃符・桃板と呼ばれるものを飾るのも、その名残です。また、現代でも「桃の葉エキス」入りの医療品・化粧品などがありますが、これも桃の木の持つ特別な作用を応用したものと言えましょう。

また、我が国の昔語りの中にも、桃の呪力に関する記載があります。「古事記」の開頭、天地創造の神話の中に、イザナミ・イザナギの二柱の神が登場します。多くの神々を生んだあと最後に火の神を生んだイザナミは、ホトを焼かれて死んでしまい黄泉の国に参ります。恋しい女が忘れられないイザナギは、イザナミを追いかけて黄泉の国まで行くのですが、そこにいた女の腐乱し蛆のたかった姿に恐れをなして逃げだしてしまいます（男なんて薄情者！）。ところがそれを見た女は、この侮辱を許しがたく、黄泉の軍隊とともに男を追いかけます（女はコワイ！）。今にも追いつかれそうになったイザナギが、黄泉比良坂（よもつひらさか）という所で、そこに生えていた桃の実を三つ手折って黄泉の軍隊に投げつけた所、軍隊はことごとく退散したというお話です。ここでも桃が悪霊を退ける神聖な果実であった事が語られています。

また、皆さんご存知の桃太郎のお話。鬼を退治に行く桃太郎というのは、そのまま桃による辟邪（邪悪を退ける）の公式を表したものだと言えましょう。

さて、このように桃の呪術性を理解した上で、この「桃夭」篇を読むと、そこに描かれた桃の木が、じつはその花の美しさや葉のみずみずしさを言うものではなく、もっと人間生理の深い所で人々の祈りと結びついた、とても呪術的色彩を帯びたものだということがお分かりいただけだと思います。「若々しい生命力に溢れた桃の若木は、その強い呪術性で嫁ぐ乙女を邪悪なるものどもから守ってくれるだろう。桃の呪力に守られて、乙女もその家族も一族も、豊かに繁栄していこう。そうあって欲しい。」という結婚の祝頌歌、これが「桃夭」篇の本質です。

最近の研究では、『詩経』は民謡ではなく祭祀歌だということが分かってきました。季節の祀り、祖先の祭りの場で、神を降ろし、降ろした神に祈りを捧げるのがその原型だと考えられます。その意味で、『詩経』に歌われる自然の風物は、単に背景や象徴として存在するのではなく、呪物として人々の祈りを体現して歌われていると言えるでしょう。時間の関係で取り上げる事ができませんでしたが、桃のほかにも、動物・魚・そして風や雨などの自然現象に至るまで、古代人はそこに強い呪術性を感じ、祈りを込めて歌い上げてきたのです。『詩経』はそんな古代人の息吹を、そのまま現代に伝える詩集なのです。